

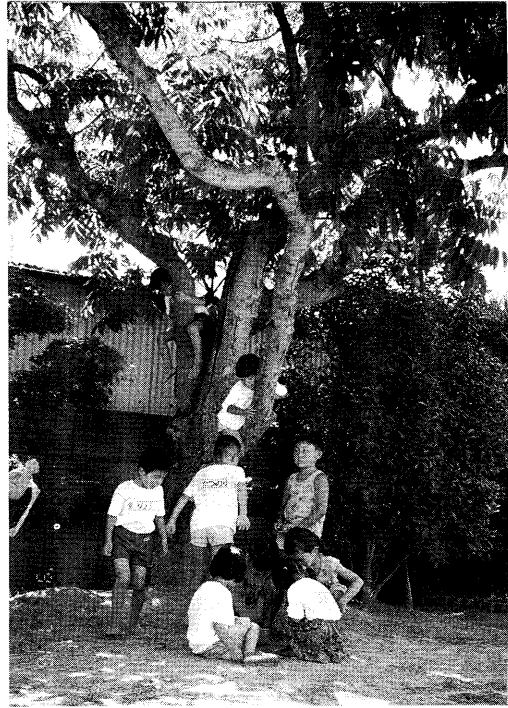
ムクロジと子ども遊び

国次 太郎

佐賀大学教育学部附属幼稚園の園庭は、極端に言えば、三日月のような形をしています。凹んだ側に顔を描いたとすると、中心の鼻のあたりにムクロジの樹があります。樹高は10 m足らずで、幹の直径は約40 cm、根元が心もち高くなっていて、子ども達の遊びの中心の一つです。陣取りのときは、一方の陣になります。この樹の下ではままごとにもよく開催さ

れています。また、木登りにちょうどいい枝振りですから、元気な子がよく登っています。(写真1)

夏の花火会のとぎのちょうちんも、秋の運動会のとぎの万国旗もこの樹を基点に飾ります。運動会ときは、この樹がでしゃばっているの、コースを少し曲げることになっています。園庭には、この他に、もっと大きく20 mはありそうな四本のクスノキ



▶写真1

やすばらしい藤棚などもあり注意を引きますが、このムクロジも本園では気になる樹の中に入れられま

す。
ムクロジ（無患子、無患樹、木槵子、学名

ています。

ムクロジの果実は球形で直径約20mm、基部の片側に未発達の花皮を盤状につけています。ちょうど袋一杯に何かを入れて口をしばったように見えます。

Sapindus Mukurossi Gaertn.) は、ムクロジ科の落葉高木で、別称を、ムクツブ、モクゲンジというそうですが、佐賀ではムクロと呼んでいます。
ムクロジの呼び名は、その中国名木槵子（もく・げん・し）が、同じムクロジ科のモクゲンジの中国名木欒子（もく・らん・し）と入れ代わったものと牧野植物図鑑では説明しています。

ムクロジ科には、楊貴妃が好んだといわれるレイシ（荔枝）も入っています。

果実のなかに意外に大きくて硬い楕円体の種子が一個入っていると、よく似

中に一個ある種子は黒くて硬く、球に近い楕円体で直径約12mmです。一方に褐色の綿毛がついています。果皮は石鹼のなかつが、容易にとれてしまいます。

▼カッター



た頃から洗剤として使用され、特に、絹などを洗うのに適しているとのこと。種子は羽根突き（カッター）の羽根の球に使われました。

私共がムクロジに関心をもつのは、羽根突きという昔の遊びに使われたので、子どものころが懐かしく郷愁を誘われるからでしょう。その羽根の球がこんな木の実であったという思いがけない発見の喜びと驚きが重なります。

平成生まれの現在の園児達は、そんな事情には関係ないので、それぞれ素直な興味をもって、独自の楽しみ方をしています。園児達は、昔からのお正月の遊びということで先生方が正月明けにやってみせる羽根突き（カッター）に心をしめして、羽子板、羽根の姿や形に興味をもちますが、羽根突きが自分ではうまくいかないので、その興味も長くは続きません。

園庭のムクロジは六月に枝の先に大きな円錐花序をつけ、淡緑色の目立たない花がたくさん咲きま

す。そのときは黒く大きなクマバチが集まりますのでよく分かります。夏には緑色の実がだんだん大きくなりはじめ、同時に落ちはじめます。虫に食われたか自然に淘汰されるのか未熟なまま落ちてきま

す。
冬には、果皮も黄褐色になり、中の種子が黒く硬くなっています。乾いた実を振ると、中の種子がカラカラと軽い音をたてます。乾いた実は冬から春にかけてずっと落ち続けます。次の新しい実ができて昨年古い実は落ち続けますから、七月には8mm位の新しい実と二種類落ちています。(カット2)

ムクロジは夏には気持ちのよい木陰を作ります。ムクロジの葉は互生、有柄、大形、羽状複葉、長さ約50cm、小葉は広皮針形、全縁。ちょうど、お吸い物に入れるサンショウの葉の柄についた小葉を細くして、全体をずっと大きく拡大したような葉です。

ムクロジの葉は秋には黄葉して、小葉と柄がばら

▲カット2



ばらになって散ります。冬には、枯れ枝にたくさんの実がぶらさがっていて、スズカケはこの木の名前でもよいと思われるような姿になります。(写真2)

乾燥した果皮は鼈甲のような色で手で割れますが、水気が多いときはヌルヌルするので子ども達は



さわりがりません。しかし、園児達のなかには、このマルナルを本来の使い方である洗濯に利用した子もいました。普通、園児達は地面に落ちた果実を靴でグリグリと踏み付けて種子を取り出しています。

ドングリと違って、ムクロジの熟した種子は乾燥すると、さらにつやがでて非常に硬くしかも軽くてよく弾みます。数珠や羽根の球に使われたのも無理のないことです。

年配の方のお話では、ムクロジの種子を集めて売ればいいアルバイトになったそうです。また、この種子をビー玉のように使って遊んだということがあります。

ムクロジを使った昔の遊び「むくろ打ち」を紹介しましょう。

◎ 小さい板ぎれ、普通は昔の板製の塵取りの裏側であったそうですが、その板ぎれを立てかけて、前

に横線を引いておきます。定位置からその板ぎれに順番にムクロジの種子を投げつけて、跳ね返った種子の位置が横線に最も近い子が勝ちというものです。板ぎれの真上から垂直に自然落下させたり、前の横線を越えると失格になったり、引き続き自分の種子を仲間の種子に当てて取るといった別のゲームに進行したりするなど、この遊びのルールにはいろいろなバラエティがありました。いずれにしろ、羽子板で羽根を突いたときに聞かれる硬く乾いた音と種子の弾性を、男の子も楽しんでいたようです。

佐賀県保健体育研究会体育学習研究会編著『佐賀県につたわることも遊び』（光文書院、一九八四）には類似のルールの「むくろ打ち」と「天から落とし」が紹介されています。また、この本では種子は拾ったり店で買ったたりして使ったことや、ムクロジの樹が少なくなつてビー玉が手に入りやすくなったので、これらの遊びが廃れたことなどが記述

されています。

園児達はさまざまな遊びを工夫します。先生方から聞いたうち、いくつか紹介しましょう。

◎ 大きな板を斜めに置いて、その上に積み木などで障害物をいくつも作り、ムクロジの種子を上から転がして、落ち方を楽しみます。傾けたパチンコと似たようなものです。種子が弾みながら転がって行きますから、弾性と音を楽しむ点は昔の遊びと共通しています。また、種子は楕円体なので必ずしもまっすぐには進まないところが興味を増すようです。同時にたくさん転がして、砂場の山から水を流すような遊び方もしています。

◎ トランポリンの上にたくさんムクロジの種子を乗せたまま一緒に弾みます。ぬいぐるみや人形も仲間に入れたりします。種子がいろいろな弾み方をするのが面白いようです。

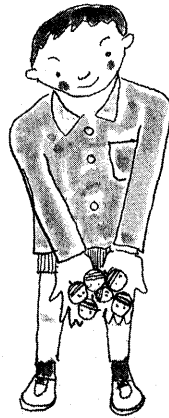
◎ 牛乳パックなどに種子を入れて、マラカスを作

ります。ジュズダマや小石や砂を入れたりもしますが、それらに比べて柔らかい音が出ます。

◎ 園にニワトリはいますが、正式な羽根を自家製で作ることはしません。種子が未熟であれば穴をあけるのは簡単ですが、乾燥した種子に穴をあけることは難しく、不用意に試みると種子より先に指に穴があきそうです。昔、多量の羽根を作るとき、どのようにして竹ひごを突き刺したのでしょうか。

卒園した小学生が生活科で羽根を作るといって拾いに来たことがあります。その子は種子をポリエチレンでくるんできつくしばって端をギザギザに切って羽根にしました。

◎ きれいな黄色の落ち葉を頭と鉢巻の間に差し込みます。二枚差せば、ウサギなど動物の耳になります。一枚差して、インディアンの子どもになり、たくさん並べて差して、大人のインディアンになります。もちろん、インディアンの羽根飾りのつもりで



す。

◎ 落ち葉に混じった長い葉柄は、ままごとの焚火の薪になりました。また、たくさん束ねて、庭ぼろきになることもありました。

◎ ままごとは、場所や場面を変えながらよく遊ば

れます。そのなかで、ムクロジの実や葉はいろいろな料理の材料になります。例えば、黒い種子は砂や粘土のケーキのデコレーションになっていました。

◎ 種子ですから、ムクロジの種子を園児はお好みの場所に植えます。砂場に植えるのはいつものことです。園内のまさかと思う場所に芽生えて順調に育っている運のいい幼木があります。園外でも幼木を発見することがあります。このなかにはきつと何年前の園児の活動の結果が入っているはずですよ。

このような園児達の遊びには、大人の常識とは違うものが見方が見られ、驚いたり納得したりしています。また、園児達は大人になったとき、私共とは異なったムクロジ観と郷愁をもつのでしょうか。

遊び自体について言えば、園児達の遊びにくらべると、「むくろ打ち」などは勝ち負けの厳しい遊びです。年上の子どもの達のものらしく、ルールが工夫されていて、技術が必要であり、遊び方に磨きがか

かっています。当時の幼児達はせいぜいそばで見物していただけで参加はできなかったでしょう。

羽根突きはながく受け継がれてきた遊びですが、お正月の遊びとして遊ぶ期間などが限定されていたし、バドミントンやテニスといった既製のスポーツが輸入されたので、羽根突きのルールや技術などが発達してバドミントンのようなスポーツになることができなかったのでしょうか。

本園のムクロジを使った遊びの紹介をさせていただいたただけでなく、ムクロジを通して、遊びの発生や伝承、ゲームとしての磨かれ方、ルールや技術の発達などいろいろと考える機会を与えていただきました。ありがとうございます。

(佐賀大学教育学部附属幼稚園園長)